

『図書館学序説』においてピアス・バトラー(Pierce Butler)は「図書とは人類の記憶を保存する一種の社会的メカニズムであり、図書館はこれを生きている個人の意識に還元するこれまた社会的な一種の装置といえる」という言葉を残した¹⁾。この「図書」を情報メディアに置き換え、それを「還元する装置」として図書館をとらえて考察する。情報メディアが爆発的に増加している現代にあっては、図書館の機能も変化すべきところだが、個人の意識に還元する装置という視点をふまえて、とらえ直すべき時期に来ていると考える。

1. これまでのメディア

古代、メディアに情報を記すことは、すなわち還元すべき知であった。粘土板の時代はもとより、木簡や紙が貴重な時代にあっては、それらに固定化する情報は吟味され重要な情報であった。メディアに記して保存することと、残すべき情報とは同じものであった。

中世に至り、宗教的な側面から出版することは、すなわち次代に伝えるべき情報を集成したということにほかならない。それまでの歴史の中では、情報メディアそのものの中に還元すべき知という取捨選択の機能が働いていたと言える。

図書館史において、例えばアレキサンドリア図書館や、金沢文庫、書籍館などにおいても、その図書館長がどのような人物であったかが重要視されている。館長は知を残すという重要な任務を担っていた(このことは現代において地方図書館の館長の任務と対照的である)どのような知を集めるか、そしてそれをどう「還元」するかという使命を、図書館自らの仕組みの中に内包していたといえる。ここまでの歴史においては、メディアという装置、そして還元するメカニズムが十分に働いていた時代であったと言えよう。

2. 現代のメディア

近代に入って、情報メディアの多様化が一気にすすむ。活字印刷の普及は、知のメディアの大衆化をもたらす。だれでも読み書きが出来る時代は、膨大なメディアを残す。文字メディアだけではなく、演劇、オペラ、映画、音楽、そしてラジオ、テレビと、情報メディアは爆発的に増加した。そうした中で、情報メディアは「残すべき」情報だけでなく、楽しむため、娯楽のメディアとしても用いられる。これはそれまでの歴史の中で、十分に知が

還元し、多くの人々に知的情報が膾炙した結果とも言える。

伝統的に図書館という装置は、書物としてのメディアを残す機能を引きずって来たため、メディア全般を残す装置としては完結できず、他の多くのメディアを残す装置（すなわち、動物園・博物館・美術館などのミュージアムと、文書館などのアーカイブズなど）を必要としていった過程が見て取れる。その一方で、現代の図書館は娯楽の提供という側面も見いだされてきた。今日の公共図書館が果たしている役割は “無料貸本屋” という汚名もあるように この娯楽の面が強調されているともとれる。メディアすべてを残せていないという点と、知を還元するという機能から離れている、という2つの課題を見て取ることが出来る。

情報メディアの爆発的な増大はすみ、著者や出版社という権威的なシステムだけでなく、個人個人までがメディアを通して情報を発信する時代となった。Webの普及は、伝統的なホームページ・メールマガジンなどにとどまらず、個人的な日常を綴ったブログや、はたまた日々のつぶやき(Twitter)までも情報メディアに載るようになった。ここまでくると情報メディア=残すべきメディアとは到底言えず、新たに、何を残すべきかという課題、どれが「還元する知」なのかという課題をもたらしていると言える²⁾。

3. これからのメディア

今夏政権交代が実現し、初めて「事業仕分け」なるものが行われた。政策の継続決定を公開の場で議論したものであり、これに喝采を送る声は少なくなかった。その一方で、例えば科学技術分野の見直しなどは議論を呼んでいる。国家百年の計を考えれば重要な投資も、短期的な結果が見えないと切られてしまった形である。政策判断を市民的なレベルに降ろしてきた点は評価できるが、しかし降ろされた側に判断できる能力が備わっていなかったのではなかろうか。前鳥取県知事の片山善博氏は論文³⁾の中で「図書館は民主主義の砦」と評している。中央官庁のいいなりにならず、また大衆的な報道に流されない力、自ら考える市民を創り出してゆくには、図書館の機能が果たす役割は大きい。娯乐的な面を強調した（「中小レポート」や「貸出至上主義」）のは多くの市民を引き付ける作戦であったと今は評価できるが、税金を

使ってそればかり強調するとそれこそ「仕分け」られてしまう。本来の役割「知を還元する」という命題を取り戻し、この民主主義政策を考えられる力を養う機能ととらえ直したい。

他方、増大するメディアにあっては、図書館という枠組みではもはやとらえきれない。例えば図書館が充分とは言い難い横浜市においてだが、開港期からの歴史資料は「横浜開港資料館」「都市発展記念館」などにおいて十分に収集されている事例が見られる。資料館や公文書館などの機関も通じて土地の情報はその土地に残す方向を考えたい。また書物でないメディアは美術館や博物館で保存し、M・L・Aの連携をすすめていくべきである。

すべてのメディアを保存する機能を分担する。そして図書館は「民主主義の砦」を想定して、知の集成を個人の意識へと還元する装置へ。この2点を未来の図書館像としたいと思う。

参考文献

- 1) ピアス・バトラー著、藤野幸雄訳. 図書館学序説. 日本図書館協会, 1978. p.23.
引用は次による。前園主計編. 図書館サービス論. 東京書籍, 1988, (新現代図書館学講座 4) p.12.
- 2) 国立国会図書館の長尾真館長は2009年12月7日の「ウェブ学会シンポジウム」(東京大学)で「Googleが10年後もいまと同じ集め方でサイト情報を集めてるか疑問。どういう情報を“集めない”かという判断することになるだろう」と述べた。
岡田有花, ITmedia. “ウェブ学会シンポジウム：長尾館長が語る、Google検索の限界とその先” ITmedia News. 2009-12-07. (参照 2009-12-08)
- 3) 片山善博. 特集図書館への提言：図書館のミッションを考える. 情報の科学と技術. 2007.4. 57(4), pp. 168-173.